

まえがき

平成九年七月、海上自衛官として下関（山口県）に勤務していた時、中小企業向け銀行の支店長から講演を依頼されたことがありました。

下関の地で、会社経営に活躍している女性を対象に、「女性企業家の会」を立ち上げる計画で、その発会の記念に講演を企画しているが、については、その講師をお願いしたいとの依頼でした。

日頃は経済活動だけに傾注しがちな女性社長の皆さんに、国の安全が保たれているからこそ、日本経済が発展している事実について、改めて認識して貰い、国防に対する理解と知識を広げることでも会社の運営に自信を深めて欲しいとの、^{しっか}確りした目的を定めた講演でした。

当日、二〇名の女性社長を前に、現職自衛官の経験を下にして、「^{いのち}生命の尊さ」から説き起こし約一時間、「我が国の安全保障」について講話をしました。

白の制服で語る小職の前に、最初は緊張気味だった皆さんが、何時しか、サラサラとメモを取り始められると、話すこちらも、つい熱が入るひと時でした。終了後、夫々の立場で「明日の朝礼では、国防の大切さを社員に話します」と述べられた瞳の輝きが、今なお鮮明に残っています。

その後、退官してからも求めに応じ「国を守る心」と題して講演する機会が何度かあり、「国防思想」の普及には微力を尽したつもりでしたが、つい最近になって、国政が混迷する中で「日本の安全保障」に対する国家としての考え方が、以前にも増して「^{うごさへん}右顧左眄」を繰り返し「^{うおうさおう}右往左往」する現状に、心を痛めるようになりました。

過去、所謂「^{いわゆる}五五体制」の政治情勢では、政策に「何でも反対する」野党と不毛の論争があっても、政権移譲は起こらないとの前提で、政府与党の盤石性に国民も安住してこれを眺めていた節が^{うかが}窺えました。しかし、「五五体制」が崩壊し、自民党中心与党政府から民主党中心与党政府へ政権が交代した時、

本来、国家の外交政策と安全保障政策には一貫性が求められるにも^{かかわ}拘らず、自

衛隊の存在と運用に関して、「憲法違反」から「存在黙認、実効運用」に至るまで、政策が定まらない政治状況を目の当たりにすると、「国防」について真剣に議論することなく情眼を貪り続けた一部国会議員の無為無策が露呈したのだと、憤りを覚えたのです。

戦後の教育現場では、確かに小学校から大学まで、「国家の安全保障」を正しく学ぶ機会が無かったのは間違いありません。

「平和」を強調するあまり、その根底となる「国防」を無視し続けた教育現場の偏向性が、「平和の尊さ」は教えることができても、「国防の重要性」を教えることができない教師を生み出したことも事実です。

こうした戦後教育を受けて育った人物が、政策立案に携わるならば、「国防音痴」あるいは「国防敵視」が色濃く出てしまうのも仕方のないことかも知れません。

しかし、「国家の安全保障」が個人の主観に左右されていては、「国家の生存」そのものを危うくすることは明らかです。

「平和」を希求する理想は、当然ながら高く掲げ続けることが肝要です。その一方で、変転激動して安定しない現実の国際社会の中で、国民を確実に生き残らせるための方策を追求し続けることも、同時に重要なのです。

この視点で「我が国の安全保障政策」を眺める時、国民に対する防衛意識の啓蒙不足と、防衛意識に乏しい国民から乖離した「独りよがりの防衛政策」とに、一抹の侘しさを覚えたのです。

この「侘しさ」を払拭するには、「国を守る心」について若い世代の方々に今一度、語り伝える努力をするしかないと悟りました。

「国を守る」とは何か、「何から何を守る」のか、日本を守る根本の「原理・原則」を、日本の将来を背負う高校生から四十代の貴方達（キミ達）に理解して貰い、「我が国防衛」の一助にして頂きたいと筆を起こした次第です。

下関の地で、女性社長の皆さんに判り易く説いた「安全保障」を、少し掘り下げ、視野を広げて、「辻説法」に纏め若いキミ達に捧げます。